

## 言葉の力を信じますかージャーナル発刊に寄せて

外国語教育センター長

教育担当副学長 坂本 一光

言葉の力を信じますか。そう問われたとき、ふとよみがえるのは、学生時代に聴いた歌（海援隊）の一節である。

本などひろげて 言葉をさがすより 人は 空を見上げているほうが  
ずっとかしくなれるんだと 遥かなる人の声が ぼくに届く

「遥かなる人」（坂本竜馬）は、言葉の力を信じていたにちがいない。なぜか、そう思った。  
また、言葉の詩人は、「言葉なんかおぼえるんじやなかった」という「殺し文句」でこの問いに止めを刺した。

帰途 田村隆一

言葉なんかおぼえるんじやなかった  
言葉のない世界  
意味が意味にならない世界に生きてたら  
どんなによかつたか

あなたが美しい言葉に復讐されても  
そいつは ぼくとは無関係だ  
きみが静かな意味に血を流したところで  
そいつも無関係だ

あなたのやさしい眼のなかにある涙  
きみの沈黙の舌から落ちてくる痛苦  
ぼくたちの世界にもし言葉がなかつたら  
ぼくはただそれを眺めて立ち去るだろう

あなたの涙に 果実の核ほどの意味があるか

きみの一滴の血に この世界の夕暮れの  
ふるえるような夕焼けのひびきがあるか

言葉なんかおぼえるんじやなかつた  
日本語とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで  
ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる  
ぼくはきみの血のなかにたつたひとりで帰つて来る

さて、教育の危機が叫ばれて久しく、それは今も続いている。教育の危機は社会の危機である。したがって、教育の質の向上は、すべての教育段階で厳しく問われることになった。うろたえ、右往左往することもあるけれども、大事なことは、危機の本質を見逃さないことではないか。当たり前だが、教育の質は、危機の本質に関わって問われている。

それでは、教育の危機、あるいは社会の危機とは何だろうか。「人間の危機」をおいてほかに何の危機があるか、と思う。20世紀は人類にとって未曾有の進歩の時代であったが、「人間の危機」の時代を克服できなかった。危機は、われわれの時代が引き継いでいる。

「人間の危機」の根底には、それがすべてではないが、「言葉の危機」があるだろう。「魂は表現されなければ、それが存在するのかどうか、当人にさえもはっきりしない」（加藤周一）のだから。他者と関わって社会的に生きて行くわれわれは、言葉によって、世界を理解する。言葉によって、自己を表現し他者と交流する。現実の世界は、自然・社会・歴史・文化・人間等の何であれ、正しく理解されさえすれば、われわれのものの考え方を変えてしまうほどの力をもっている。現実の世界からわれわれの中に浸透した力は、翻って世界の現実を変え、それを支える力になるだろう。教育は、その過程に関わる。

言葉による世界理解。教育の危機の根底で、それが問われている。高等教育の危機の時代に、われわれはジャーナルを発刊する—その意義に改めて思いを致したい。